主体的に課題を追究し，他者と協働する生徒の育成（2年次）

～事象の関連に気付き，他者と関わり，学びを深める方略の研究～

庭瀬　奈穂美，老松　謙
Naomi NIWASE, Yuzuru Oimatu

概要

前次研究では，生徒自身が今までの学習を振り返り，既習事項や学習経験を生かして自ら学ぶ方略や最適解を他者と協働しながらつくりあげていく方略について研究を進めてきた。その成果と課題を踏まえ，今次研究では，単元間や分野間のつながりを意識した学びを促す単元構成の工夫，課題の追究に有効であり，学びの深まりにつながる協働の方策について研究を進める。

キーワード：公民としての資質・能力の基礎，　他者との協働，単元や分野間のつながり，単元構成

1．はじめに～研究の目的

学習指導要領で求められている公民としての資質・能力の基礎を養うためには，生徒一人一人が社会的事象を的確に捉え，社会における課題を見いだし，他者と協働して課題の解決に向けて追究することが必要である。また，実際に現実社会で見られる社会的事象には，多くの要因が複雑に影響し合っており，社会的事象の中に見られる課題に対して，正解が明確でない状況に直面している。

このような中で，課題を追究していく力を養うには，それまでの知識や経験などから，関連性や類似性のあるものを選択し，課題の解決に活用できるものを見いだし，活用していく力が不可欠である。また，現実の社会においても，解決が困難であり，正解がわからないからこそ，多面的・多角的に事象を捉え，解決方法を検討するために他者との協働が必要となっている。そのため，課題を追究していく力を養うためには，他者と効果的に協働する力を養う必要がある。しかし，生徒の実態として，意見を交流することで，気付きはあるものの，解決の方向性は見いだすことはできない現状が見られる。課題の解決のための協働には，相互に主張の根拠が明確であったり，主張している事柄を理解し合ったりすることが必要不可欠であり，これらの力を身に付けさせる必要があると考える。

2．生徒の実態（1年次研究の成果と課題）

本校社会科の1年次研究では，「学びを生かし，思考力・判断力・表現力等の客観性を高める方略の研究」を副題とし，課題に対して，学習で得た知識・技能を活用し，他者と協働して追究することのできる生徒の育成を目指した。そのために，1年次は，単元の構成の工夫として，得た知識・技能を活用して追究できる課題を単元の後半に設定したり，他の単元で既に学習して得た知識・技能を活用できる課題を設定したりした。生徒は，既存の知識を活用して，課題を解決しようとしている姿が見られたことから，このような単元の構成は有効であったと考える。

また，多面的・多角的に社会的事象や課題を把握し，考察することが，他者との協働の必要性を生徒に実感させるには，有効であったと考える。課題の解決に当たって，自分だけでは解決できず，他者との対話の必要性が感じられることによって，より有効になったと考えられる。また，多面的・多角的に考察することで，主張の信頼性や妥当性が高まることを実感したと考えられる。これを実感させる具体的な例の1つとして，ジグソー法を取り入れて実践した。

さらに，資料に基づいて主張することを徹底することで，

適切な協働の方策にも向かうことができたと考える。社会的事象に見られる課題には，解決が困難であったり，因果関係が複雑であったりするものが多い。それらに対して，協働してアプローチするには，それぞれの意見の根拠が明確でなければならない。根拠として適切に使用することができる資料を提示することによって，自分の主張が他者に受け入れられ，また，他者の主張から自分の理解も深まったと考えられる。そして，このことが，多面的・多角的に考えることの有用性を感得させ，思考力・判断力・表現力の客観性を高めることにつながっていくと考える。

しかしながら，以下のような課題もある。

①分野間・単元間の関連性が十分に担保されていない。
②協働の必要性を実感させることや，協働の方略の定着が不十分である。

①分野間・単元間のつながり

これまでの実践において，既存の知識・技能を活用して学習課題を追究できるように，単元の構成を工夫した。しかしながら，実践を行った単元だけでなく，他の単元においてもこのような関連性を整理し，単元構成を意識する必要がある。また，分野間のつながりにおいても，どのようにつなげ，関連性をもたせていくかについて，中学校3年間を見通して設定していくことが必要である。

②協働の在り方

前年次研究では，ジグソー法を用いて，協働の必要性を実感させた。しかし，この手法は万能であるとはいえず，学習課題に応じて適切な手法を検討すべきである。また，公民的資質の基礎を養うという目標からも，正解のわからない課題に対して，他者と協働して解決に向けて追究していく力は必要不可欠である。そのため，どのような場面で，どのように他者と協働することが有効なのかを，多様な方法で検証することが必要である。

以上のように，生徒が身に付ける知識・技能におけるつながりと学び方における他者とのつながりについて，今後の研究を進めていくことが必要であると考える。1年次研究の課題の上に立ち，分野や単元の結び付きをさらに明確にして単元を構成することや，課題の解決に向けて他者との協働を有効に進める方策について深く追究することが肝要であると考える。

2．1．目指す生徒像

本校社会科では，以上の課題や求めを踏まえ，2年次研究の目指す生徒像を以下のように捉えた。

・単元や分野間のつながりを意識し，課題の発見や解決に活用することができる生徒
・他者との協働を通して課題を追究し，学びを深める生徒

3．研究主題及び副題

生徒がこれから生活する社会では，正解が明確ではない課題が数多くある。その課題に向かうために必要な力を身に付けることが，公民としての資質・能力の基礎を養うことだと考える。そのために，類似性のある他の事象をもとに思考すること，主体的に他者と協働することが必要である。他者と協働して追究するためには，互いの立場を明確にすることや，他者に伝わるように自分の思考・判断を伝えること，他者の思考・判断を的確に理解したうえで，自分の思考・判断を見直したり，確かなものにしたりしていくことが求められている。

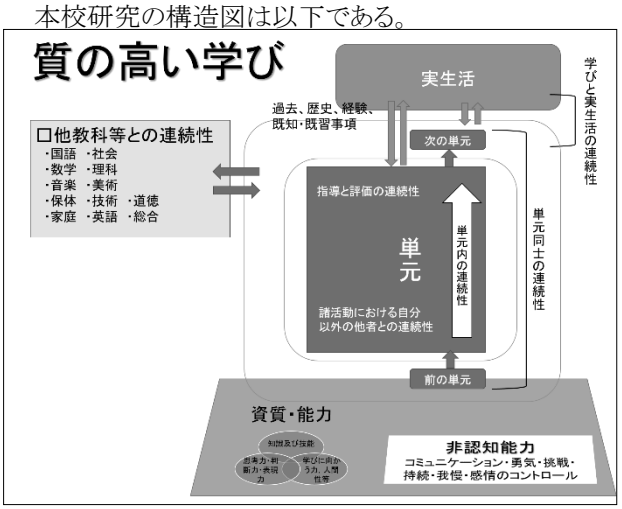
以上のことから，本校社会科の2年次研究の主題と副題と以下のように設定した。

主体的に課題を追究し，他者と協働する生徒の育成（2年次）
～事象の関連に気付き，他者と関わり，学びを深める方略の研究～

4．研究の内容と方法

本校の2年次研究においては，生徒の実態やこれからの時代の潮流を踏まえた「質の高い学び」に向かうために，様々な側面から「連続性」というものを考えることが重要であると捉えている。

本校研究の構造図は以下である。

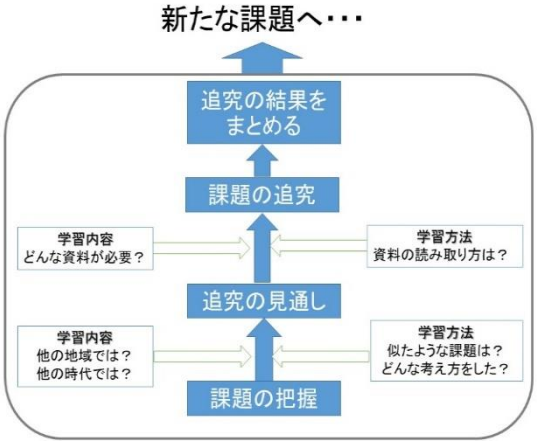


本校2年次研究の構造図

この中で，本校社会科では，特に「単元や分野間のつながり」及び「諸活動における自分以外の他者との連続性」に焦点を当てて実践研究を進めることとした。これらが，「2．1．」で示した目指す生徒の育成に向かう上で特に重要な視点であると考えたためである。

4．1．単元や分野間のつながりを意識する単元構成

社会の学習を進めるうえで，地理的分野，歴史的分野，公民的分野は本来切り分けられないものであり，現実の社会で見られる社会的事象においても，他分野の知識がなければ原因がわからなかったり，解決のためには，分野をまたがる学習内容が必要であったりすることがある。分野に固執することなく，総合的にみることで，社会的事象への理解がより深まると考える。そのために，課題の追究に向けて，問題解決型学習の一般的な流れをもとに他単元や他分野とのつながりを活用する場面を設定し，以下のような単元構成を工夫する。また，このような構成を生徒に認識させるための問いやワークシートの工夫の例を()内に表記した。



単元の構成のながれ

①単元を貫く課題を把握する。

②課題の追究に使えそうな学習内容や学習方法を想起する。（過去に似たような問題はなかっただろうか。過去にどのような考え方をしただろうか。）

③②を踏まえた課題追究の見通しをたてる。（過去の学習内容や学習方法の中から，この課題の追究に，使えそうなものはどれだろうか。）

④課題を追究する。（追究に必要な資料は？資料の読み方で気を付けることは？）

⑤課題の追究の結果をまとめる。

⑥単元を振り返って，今後も使えそうなものは？

この①～④の段階において，何について知りたいか，どんな資料が欲しいかを問い続けること，⑤の段階で，この単元の学習において知っておくべき内容事項を確認することが，学びを深めるために効果的であると考える。

4．2．協働を促す表現力の育成

三宅（2013）は，人と話し合いながら学ぶ理解の社会的構成モデルにおいて，レベル1が，「経験から固められた経験則，素朴理論があり，経験のたびに確認して強化されるひとりで作れる理論」，レベル2が，「他人に説明しながら考えをはっきりさせ，他人の考えを聞いて理解して参考にして，いろいろな考えを統合して納得する社会的に構成される知識」と述べている。本校社会科では，このレベル2で起きる経験則と原理原則の結び付けが重要であると考える。そのために必要な表現力を①他人に説明する力，②他人の考えを理解し，その中から参考にする部分を取捨選択する力，③自己の考えと統合する力の3つの力に分けて掌握し，身に付けさせることが必要であると考える。他人に説明しながら考えをはっきりさせるには，自分の考えの根拠を明確にし，自分の考えを的確に伝達することが不可欠である。社会の学習においては，この根拠が資料の読み取りに裏付けされたり，他分野や他単元での学習が活用されたりすると考える。他人の考えを聞いて理解した後に，統合して納得して再構成するには，他人の考えを鵜呑みにしたり，全否定したりするのではなく，自分の考えをさらに広げたり深めたりすることに役立つものを選択することが必要である。その選択の基準を身に付けさせる必要がある。そして，①・②で得たものを統合して自分の考えを再構成することが，より妥当性の高い考えになっていくと考える。この①～③を満たす表現力を身に付けることが，協働を促す力につながると考える。

5．実践と考察

以上の2つの手立ての効果を確かめるため，本校社会科では，2つの実践を行った。

実践A.「私たちの暮らしと民主政治」

実践B.「世界の諸地域　南アメリカ州」

5．1．実践Aにおける単元の構想

本単元の実践にあたり，第3学年の生徒は，社会参画に対しての調査の結果，以下のような意識があることがわかった。

選挙権を得たら必ず投票に行く	40.0%
選挙権を得たら，たぶん投票に行く	50.0%
あまり投票に行こうと思わない	9.6%

肯定的な回答の割合を見ると，社会参画の意識がある程度は育っているととらえられる。しかし，必ず行くと答えた理由としては，「自分の考えに合う政党や候補者がいれば，その人たちに代表になって欲しい」という考えの生徒もいる一方で，「面白そうだから」「若者が選挙に行かないことが問題になっているから」と答えた生徒もいた。

また，あまり行かないと答えた生徒の中には，「自分の一票で変わることはない」「自分が応援している人が立候補したのでなければ，投票にわざわざ行かない」「大人として義務だと思うから」といった理由を上げている生徒もいる。このように，関心はあるものの，選挙の意味や意義について深く理解したものではないことがわかる。

そこで，本単元では，民主政治の原理や仕組を学び，現在の日本の民主政治における課題を見いだし，その改善策を考察する活動を通して，一人一人の参画意識を重視して参政権について学習を進めることとした。また，単元の学習にあたり，公民の視点から民主政治の歴史を振り返ることによって，方法や制度だけでなく，民主政治には，国民の政治参加が重要であることに気付かせることができると考えた。さらに，課題の改善策を見いだすにあたり，漠然と他者と意見を交流するのではなく，他者の考えを理解し，その中から参考にする部分を取捨選択する力が必要であると考えた。また，正解がわからないながらも，他者と協働して改善策を見いだしていく力を身に付けることが，適切に政治に参加することにつながると考えた。そのため，本単元では，以下の2点を工夫することとした。

①単元や分野間の学びのつながりを意識した単元構成の工夫

②他者の意見を自らの思考に生かす記録の工夫

なお，本単元の指導計画は以下の通りである。

【既習事項】

［歴史的分野・公民的分野］

自由民権運動　大正デモクラシー

市民革命　啓蒙思想

時数	学習内容	評価規準
1・2	○民主政治の歴史を振り返る。 ○民主政治の特徴や課題とその解決策について確認する。	思・態
3～5	○現在の日本の選挙の仕組を理解する。 ○現在の日本の選挙の課題を把握する。 ○歴史的な流れや他国との比較を基に，課題の解決の方策を検討する。	思・知・態
6	○学習を振り返り，よりよい民主政治の実現のために，どのように社会に関わるべきかを考察する。	思・態

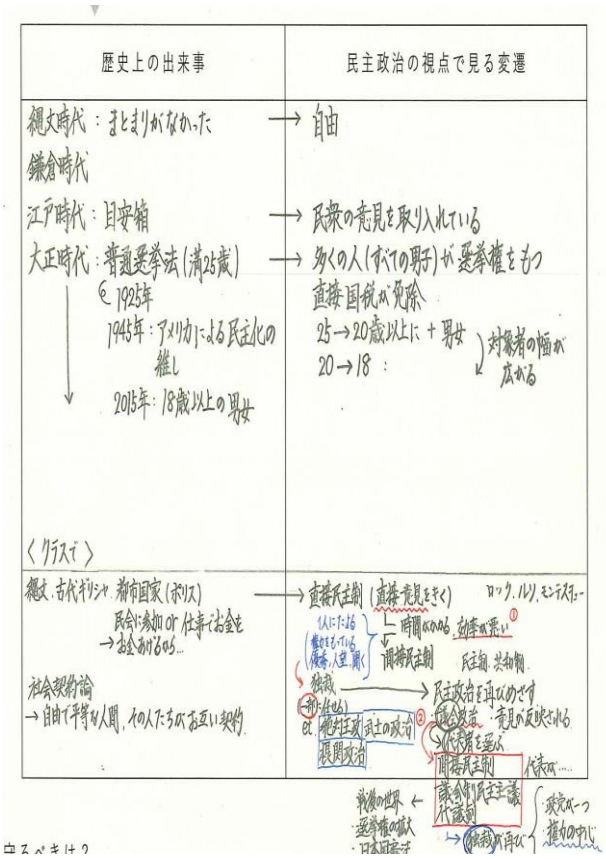
本実践に当たり，生徒の思考にかかわる記述や協働場面における様子や細かな実際については，以下に述べる。

5．2．実践Aにおける授業の実際

本単元では，「よりよい民主政治の実現のためには」を課題として，学習をスタートした。

１時間目は，民主政治の概要についての知識を確認した後で，現在の日本で行われている政治を「民主政治の実現」という視点から評価し，何点と評価するかとその理由を確認することで，民主政治についてどのような課題があるのかを判断するきっかけとした。

２時間目では，歴史的分野で学んだ内容を振り返ることと，その内容を公民的分野の視点から捉え直すことを目的として授業を展開した。民主政治の実現に向けて，歴史的にはどのような動きがあったのかを確認すると共に，その内容を「効率と公正」の視点からどのような意義があったのか捉え直し，民主政治の実現に向けての歴史的な流れを確認した。この学習の状況を以下のように生徒が記述した。



歴史的分野で学んだ時代の人々がおかれた状況との比較をしながら，「一度，得た権利は，何もしなくてもその後永続的に保障されるのか」と問い，現在の参政権や民主政治の課題をとらえさせた。

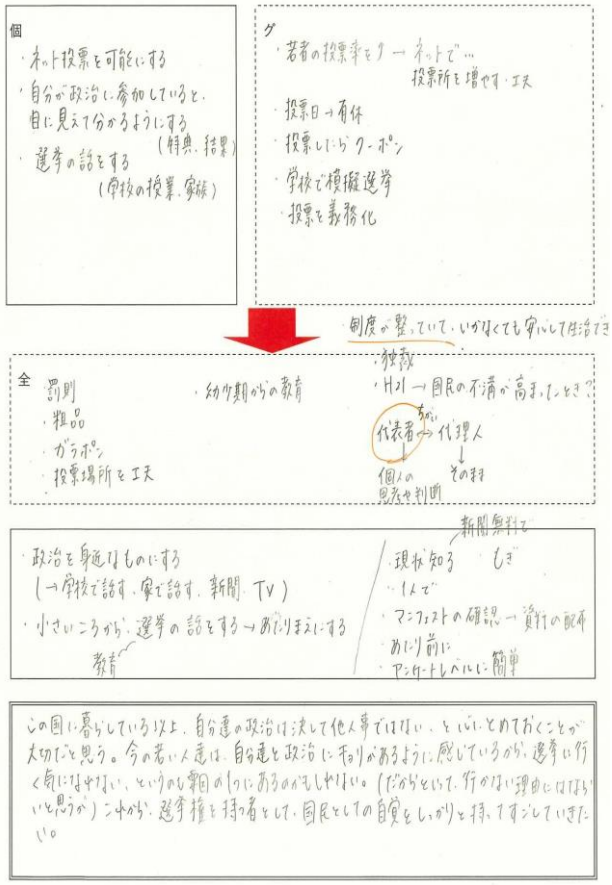
3時間目からは，現在の投票率の状況を確認し，歴史的には，人々が求めていた選挙権について，「なぜ，現在のような状況となっているのか」，「どうすることが改善につながるのか」を考察した。

4時間目では，現在の選挙の仕組みについて学習し，この過程で，投票率の低下の要因やその改善を考える1つの足がかりとした。

5時間目では，「よりよい民主主義の実現に向けて，投票率をあげるために，どのような方法が考えられるか」を個人で考えた後，グループで検討した。グループで検討した結果やその理由とともに，全体でさらに検討した。この際に，「間接民主制を取り入れている現代社会において，適切に代表者を選ぶという視点を再認識させたうえで，もう一度，グループで検討し直した。

6時間目には，これまでの学習を振り返り，改めて個人で，「よりよい民主政治の実現のために，何をすべきか」とそれに対して，「自分自身が具体的にどのような行動をとるのか」をまとめさせ，単元の学習を終了した。

5時間目からの生徒の思考の変化を記録した学習シートの例は以下の通りである。



グループでの交流や全体で検討している際には，自分と異なる意見や，同じ意見であっても，理由が異なるものについて記録し，さらに，その記録の中でも，自分の考えに取り入れられそうなものと賛成できないものに分類して，記録している。このような記録をもとに，特に賛成できないものについては，発表者に理由を確認したり，反論したりするなど，交流の活性化に有効であったと捉えている。

最後の学習シートには，日頃から，政治にかかわる話題をすることや，身近なメディアを通して，少しでも知ることなど，生徒自身が今からできることが具体的に記述されていた。

実践終了後，第3学年の生徒に再度，意識調査をしたところ，以下のような結果が得られた。

選挙権を得たら必ず投票に行く	43.2%
選挙権を得たら，たぶん投票に行く	48.9%
あまり投票に行こうと思わない	7.9%

実践前と数値的には大きな変化はないが，肯定的な回答をした生徒の理由として，「投票をしない人が政治

に文句を言う権利がないから」「将来の子どもが安心して過ごせる社会を自分たちが責任をもって築かなければならないから」「自分の考えを政治に反映できる貴重な機会だから」といった記述が見られるようになった。これらのことからも，生徒が本単元の授業を通して，有効に意見を交流しながら，自分事として参政権を捉えることができたと言えるのではないかと考える。

5．3．実践Bにおける単元の構想

本単元における実践を行うにあたり，第１学年の生徒は，南アメリカ州や社会科の学習に対して以下のような意識があることがわかった。

質問項目	1	2
日常生活で南アメリカ州とのつながりを感じる	11.5%	24.1%
南アメリカ州が抱える課題を知っている	3.4%	18.4%
グループ活動に意義を感じる	62.1%	24.1%
自分の考えを述べる時に、根拠をあげて説明している	24.1%	50.6%

※１「とてもそう思う」　２「まあそう思う」　３「あまりそう思わない」　４「そう思わない」のうち、好意的に答えた割合を示した。

まず，南アメリカ州に対する生徒の意識については，つながりは希薄であり，どのような課題を抱える地域なのかもよくわかっていない地域であると言える。

一方で，グループ活動等，他者と関わりながら学習をすすめることについて意義を感じてはいるものの，自らの主張に根拠があるか，つまり自らの「他人に説明する力」には自信がない生徒がいることが分かった。

本単元では,「南アメリカ州の人々の暮らしをより豊かにするには？」という単元全体の課題を提示し，自然環境，工業，人種や植民地支配の歴史などの観点から探究し，経済活動を中心にして「産業」や「経済」を捉えさせることとした。生徒の実態として，縁遠く感じられている南アメリカ州について,「人々の生活」という幅広い捉え方ができる学習課題を設定することで，個々の生徒の興味や関心を生かして主体的な学習につながると考えたためである。その過程で，開発と環境問題をはじめとする，南アメリカ州の地域的課題について気付かせ，その課題の解決策を考えることを通して，南アメリカ州の社会的事象を捉えさせることをねらいとした。

また，課題の解決策を見出すにあたり，より多様な視点から追究するため，毎時間交流を行わせる。この中で，相手が理解しやすい説明を意識させ,「他人に説明する力」の伸長につなげようと考えた。

以上から，本単元では以下の２点を工夫することとした。

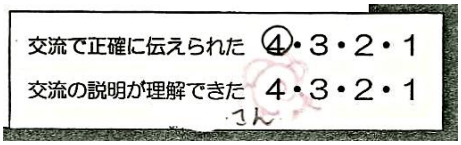
①他単元・他分野との学びのつながりを実感できる単元構成

②協働的な学びを促す単元の学習シート

①については，課題の追究において「自然」,「産業」,「人種」,「環境問題」などの視点から南アメリカ州を見つめ，単元の学習シートに追究した結果を記述した。毎時間の記述した内容をもとに，最終的に南アメリカ州の人々の生活をより豊かにする解決策を論述する。この際に，アジア州で学習したプランテーション，歴史的分野の大航海時代で学習したヨーロッパの植民地支配などと関連付けて思考させることが重要になると考えた。

今回の学びのつながりの関連図

②の単元の学習シートについては，自らの説明を客観視させるため，毎時間の終末の交流で，自己評価と相互評価をに記入させ，振り返らせる工夫をした。



↑評価の記入欄である。４（良い）、１（悪い）で評価するものとした。

自分がうまく伝えられたつもりでも，相手に伝わっていないなど,自らの説明の質を意識することで,「他人に説明する力」を育成できると考えた。

さらに,単元の終末で言語化した振り返りを行い,

次の単元でより効果的な交流を行えるようにした。

なお、本単元の計画は以下の通りである。

時	学習内容	評価規準
1	○単元の課題を設定する。 『南アメリカ州の人々の暮らしをより豊かにするには？』〔工夫①・②〕 ○南アメリカ州の概要(自然環境など)を理解する。	知 技 態
2 3	○南アメリカの産業の特徴と現在の人々の生活を関連づけ理解する。〔工夫①・②〕	知 技 思
4 (本時) 5 6	○ブラジルの経済の今後の推移を推論し、その理由を表現する。〔工夫①・②〕	思 態

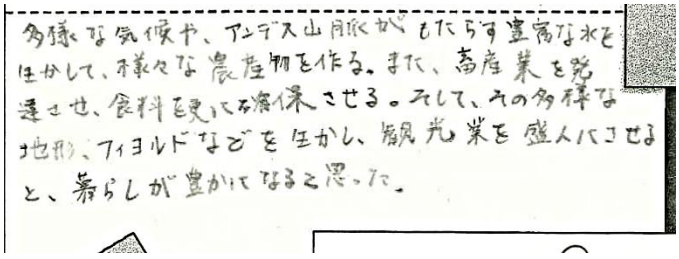
他単元の既習事項を活用できるように課題を設定し，生徒が主体的に課題を追究の姿勢できるように工夫した。

生徒が各時間で単元全体の課題に対して考えたことは，毎時間単元の学習シートに記入させた。

この単元の学習シートの記入内容の具体や授業における生徒の様子については以下に述べる。

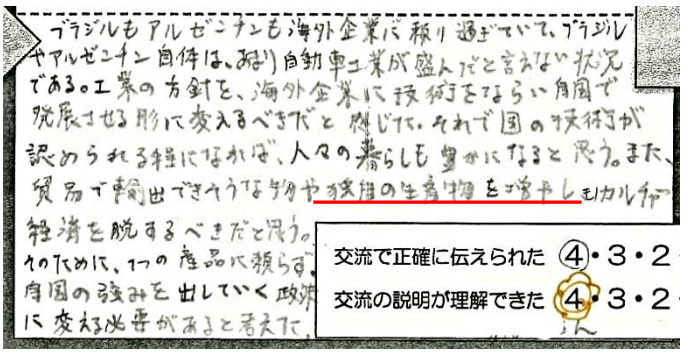
5．4．実践Bにおける授業の実際

本単元は，単元の課題を設定し，「南アメリカ州がどのような自然環境におかれているか」を調べるところからスタートした。以下は，１時間目の学習が終了した後に生徒が記入した単元の学習シートである。


多様な気候や、アンデス山脈がもたらす豊富な水を生かして、様々な農産物を作る。また、畜産業を発達させ、食料を更に確保させる。そして、その多様な地形、フィヨルドなどを生かし、観光業を盛んにさせると、暮らしが豊かになると思った。

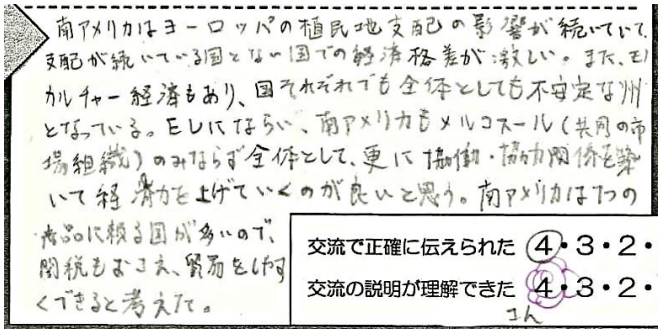
この生徒は南アメリカ州の豊かな水資源と温暖な気候という地域的特色を理解し，単元の課題に対する自らの考えを導き出している。多くの生徒が，温暖な気候を生かして農作物をたくさん生産し，輸出することが豊かになる近道であるという考えに行きついており，南アメリカ州の自然環境に対するイメージをもたせることはできたと考える。

２時間目では，南アメリカ州の産業の特色に関する資料の読み取りを行い，１時間目とは異なる視点で南アメリカ州の人々の生活に迫った。


ブラジルもアルゼンチンも海外企業に頼り過ぎていて、ブラジルやアルゼンチン自体は、あまり自動車工業が盛んだと言えない状況である。工業の方針を、海外企業に技術をならい自国で発展させる形に変えるべきだと感じた。それで国の技術が認められる様になれば、人々の暮らしも豊かになると思う。また、貿易で輸出できそうな物や独自の生産物を増やしもカルチャー経済を脱するべきだと思う。その為に、1つの産品に頼らず自国の強みを出していく政策に変える必要があると考えた。

交流で正確に伝えられた ④・3・2
交流の説明が理解できた ④・3・2

学習した内容を生かして，工業のあり方を考えた内容が中心となっている。また，下線部の記述のように，１時間目の学習内容である農業に関わることも踏まえながら思考していることがわかる。

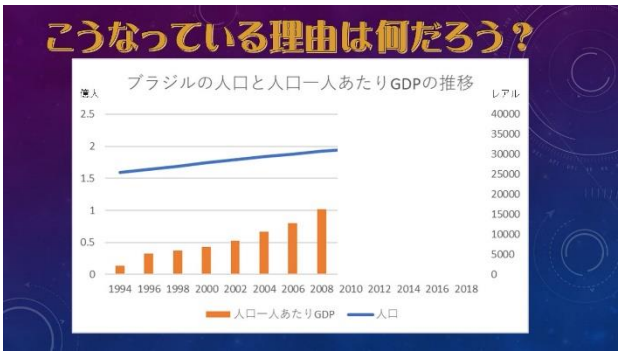

南アメリカはヨーロッパの植民地支配の影響が続いていて支配が続いている国とない国での経済格差が激しい。また、モカルチャー経済もあり、国それぞれでも全体としても不安定な州となっている。EUにならい、南アメリカもメルコスール(共同の市場組織)のみならず全体として、更に協働・協力関係を築いて経済力を上げていくのが良いと思う。南アメリカは1つの産品に頼る国が多いので、関税もなくし、貿易をしやすくできると考えた。

交流で正確に伝えられた ④・3・2・
交流の説明が理解できた ④・3・2・

３時間目には，南アメリカ州の産業と人種・先住民との関係について，各国の所得や賃金の資料から調べる活動を行った。

人種や言語の資料を読み取った結果をもとに思考した内容とともに，既習の植民地支配の歴史的分野の内容も加わって記述されている。また，「統合することで経済力の充実をはかる」「南アメリカ州はＥＵと違い，言語や宗教がよく似ているため統合しやすいのではないか？」など，ＥＵとのつながりを意識した記述が，他の生徒の学習シートでも多く見られ，他単元とのつながりが有効に作用していることが確認できた。

４時間目には，南アメリカ州の中でも近年発展を続けるブラジルの経済とその陰にあるアマゾンの環境破壊について調べ，今後ブラジルの経済がどうなっていくかを推論し，経済発展の形がどうあるべきかを考える活動をした。



初めに上のスライドを見せ，グラフがこの後どうなっていくかを予想させることを通して，ブラジルの経済が成長しつつあることを実感させた。

次に上のスライド(大豆の耕地面積と肉用牛の飼育頭数のグラフ)を見せ，経済の成長の背景には大規模に生産活動が行われていることを実感させた。

これらの資料をもとに，これからブラジルの経済や人々の暮らしがどのように変化していくかを予想した生徒の考えが以下である。

> **生活は良くなっていくと思った。多様な自然環境があり、国ごとで変わってくるけど、資源もたくさんあるから。モノカルチャー経済を少しずつ減らしていったり、他国と関わっていくと発展していけると思う。また、人口も増えているため作業効率が良くなるかも。**

大部分の生徒が今後のブラジルの経済や人々の生活が「向上していく」と予想した。

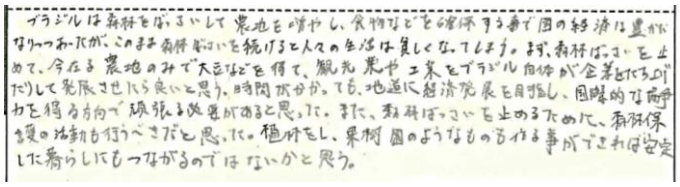
一度，ブラジルの順調な成長を見せた後に逆説的な提示を行った方が生徒の好奇心を刺激できると考え，ここで本単元の「単元の課題」を追究するうえで問題となる，「アマゾンの森林伐採」の資料を以下のような形で提示した。

この後に改めて「ブラジルの人々の暮らしはどうなると考えるか」についての生徒の考えた例である。

> **生活は停滞、またはどんどん悪くなっていくと思った。森林や大豆を生産するための土地が減っている。また、牛の飼育数も安定していない。環境面も良くはなっていない。経済的にも安定していくのか、何ともいえない。**

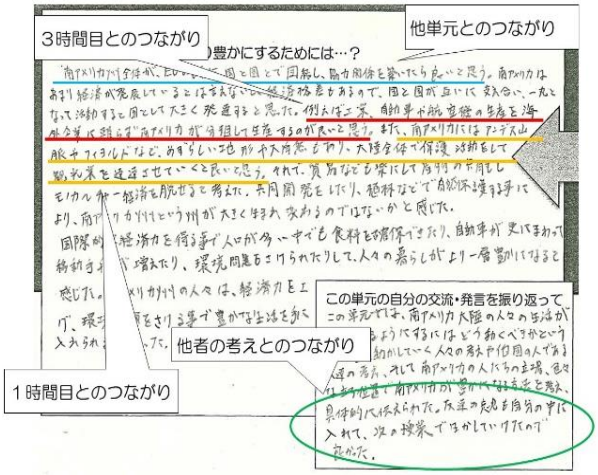
このように，大部分の生徒が環境破壊の深刻さに気付き，人々の生活にも悪影響を及ぼすというように考えを転換した。

その一方で，別な生徒の単元の学習シートの記述には次のように，これまで学習した内容を生かして，環境を破壊せずに経済的に豊かになる方策を導き出そうとする様子が見られた。


ブラジルは森林をなくして農地を増やし、食物などを確保する事で国の経済は豊かになりつつあったが、このまま森林伐採を続けると人々の生活は貧しくなってしまう。まず、森林伐採を止めて、今ある農地のみで大豆などを得て、観光業や工業をブラジル自体が企業をしてうまくだりして発展させたら良いと思う。時間は掛かるが、でも、地道に経済発展を目指し、国際的な商品力を得る方向で頑張る効果があると思った。また、森林伐採を止めるために、森林保護の活動も行うべきだと思った。植林をし、果樹園のようなものを作る事ができれば安定した暮らしにもつながるのではないかと思う。

５時間目には，これまで学習した内容を踏まえて「南アメリカ州の人々の暮らしをより豊かにするには？」に対する個人の考えを単元の学習シートに記入した後，グループごとに考えをホワイトボードにまとめ，発表・質疑応答を行った。

６時間目には，前時の発表・質疑応答の結果から，「現実的に南アメリカ州で実現可能な方策」を個人で考えさせ，全体で「最適解」だと考える意見を発表させた。その後，単元の学習シートの個人の考えを加筆・修正させた。５・６時間目の構成を個人→グループ→個人という流れにしたのは，「発表して終了」という形で終わらせるのではなく，もう一度時間をかけて考えを練り合わせ，他者の意見をよく考えたうえで自分の考えに組み込むという活動をさせるためである。



上の資料が，最終的に完成したある生徒の単元の課題に対する答えである。単元を通して学習してきた内容だけでなく，他単元とのつながりや他者の考えとのつながりなど，「学びのつながり」を生かした思考していることがわかる。

単元の学習終了後に事前アンケートと同様の項目を調査したところ，以下の結果が得られた。

質問項目	1	2
日常生活で南アメリカ州とのつながりを感じる	25.0%	37.0%
南アメリカ州が抱える課題を知っている	38.4%	45.5%
グループ活動に意義を感じる	59.0%	31.0%
自分の考えを述べる時に、根拠をあげて説明している	28.0%	47.0%

※1「とてもそう思う」　2「まあそう思う」　3「あまりそう思わない」　4「そう思わない」のうち、好意的に答えた割合を示した。

これまでに示した学習シートは一例であり，全ての生徒が同様の記述をしたことを示すものではないが，アンケートの結果では「南アメリカ州とのつながりを感じる」「南アメリカ州が抱える課題を知っている」の結果が向上していることがわかる。このことから，南アメリカ州の地域的課題に気付かせる，南アメリカ州の社会的事象を自分事として捉えさせる効果があったと考える。

また，「グループ活動に意義を感じる」「自分の考えを述べる時に，根拠を挙げて説明している」の項目については大きな数値の変化はなかったが，実践Ｂの後の単元の振り返りで「〇〇さんの意見を聞いて，自分の考えの悪いところを意識しながら書くことを意識したいです」「〇〇さんのように例えを使ったらもっとわかりやすく示せた」など，他者の意見と比較するなどの客観的な振り返りの記述が増えた。こういった点から，生徒はより自分の状態を客観的に捉えてアンケートに回答しているものと推測でき，今回の実践で質的な向上があったと考える。

故に，今回の単元構成の工夫と単元の学習シートの工夫は，事象の関連性に気付かせたり，他者と関わりながら学習を進めたりしていく上で，有効であったと考える。

6. 今次研究の成果と課題

本校社会科では，今次研究の主題を「主体的に課題を追究し，他者と協働する生徒の育成」と掲げて研究を行ってきた。これまで，2年次研究について述べてきたが，以下に本研究の成果と課題，および今後の展望を述べる。

6．1．研究の成果

本校社会科の2年次研究では，副題を「事象の関連に気付き，他者と関わり，学びを深める方略の研究」とし，他者と協働しながら主体的に課題を追究し，学ぶことのできる生徒の育成を目指した。その方策の1つとして，単元構成については，単元や分野間のつながりを意識させる構成を工夫すると共に，「他の地域ではどうたったか？」「他の時代では，どのように解決していたか？」「かつて効果があったやり方が現在でも有効だといえるか？」など，それを生徒に意識させる問いを重視した。このような問いにより，生徒は，既習内容を振り返ったり，自らの学習の記録を読み返したりする姿が見られた。これらのことからも，単元の構成と，それを生徒に意識させる問いを併用することが有効であったと言える。

協働の必要性については，学習シートを適切に活用することにより，自分の思考・判断の変化を記録することや，変化のきっかけが何だったのかを生徒自身が認識することにつながったと考える。また，自分と異なる意見を取り入れる際にも，漠然と聞くのではなく，その意見に対して自分自身の思考と比較し，どのような意味があるのかを価値づけしながら聞くことが新たな自分の思考を構築していくうえで効果的であったと考える。

6．2．研究の課題と今後の展望

以上の成果があった2年次研究であるが，その一方で課題もいくつか見られる。例えば，以下のような課題である。

①協働場面における生徒個人の思考を適切に把握し，評価すること

特に，「主体的に学習に取り組む態度」については，生徒が自分自身の学びをどのように調整したのか，どのような状況であった時に，粘り強く学習したと評価できるのかなど，具体的に考えることが必要である。また，そのような態度をどのように育てていくのかを単元全体を通して計画的に進めていく必要があると考える。

②より効果的な協働の方策の工夫

グループや全体での交流場面において，自分の思考・判断と比較し，その結果を記録していくことで，他者への質問が必然的に生まれてきたり，自分自身の思考の変化やそれに他者が影響を与えていることを実感させられたりしたと考える。一方で，他者からの質問やフィードバックを自分自身の思考・判断に有効に活用する力を身に付けさせることや，自らの思考を構築する場面において，主体的に他者に意見を求める態度を身に付けさせるには，どのような手立てが必要なのかを探っていきたい。また，他者との交流場面で，有効に ICT を活用することで，より多くの他者と交流したり，個人の学習

の足跡を確認し，自らの思考を構築したりすることにつながると考える。その方策について考え，実践していく必要があると考える。

以上のような課題から，今後は，自己の思考・判断の再構築の場面に焦点を当て，研究を進めていきたい。自分の思考・判断と他者の思考・判断を比較した後に，どの部分は主張すべきか，どの部分は他者の意見を取り入れるべきか，あるいは，新しい意見を生み出すためには，どのように考えるべきかといった再構築のために生徒が身に付けるべき力を明確にし，それらを身に付けさせる方策を検討し，実践したい。同時に，そのために活用することができるツールについても研究を進めたいと考える。

参考文献・論文

(1)岩田一彦.「社会科授業研究の理論」.明治図書.2008

(2)岩田一彦.「社会科固有の授業理論」.明治図書.2010

(3)三宅なほみ.「変革的な『形成的』評価の提案個人の学習過程を評価して，次の授業展開につなげる評価はいかにして可能か」. 育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会（第5回）資料1. 2013

(4)澤井陽介.「社会科の授業デザイン」.東洋館出版社.2015

(5)国立教育政策研究所.「資質・能力 理論編」東洋館出版社.2016

(6)澤井陽介.加藤寿朗.「見方・考え方社会科編」東陽館出版社.2017